

Nakatani Foundation

CONCEPT BOOK
2026

MESSAGE

可能性を未来へ紡ぐ。

公益財団法人 中谷財団は1984年の設立以来、計測技術を医学に応用し、病気の解明や予防、健康管理など医療の発展に役立つ先導的技術の発展と豊かな人材を育成するために多くの支援をしてきました。これからも日本が発展していくためには、優れた研究者や科学者が一層必要となります。中谷財団では、設立40周年を迎えた2024年に事業の活動分野を医工計測技術から、日本が世界をリードする分野と注目されている、BME(Bio Medical Engineering)分野～生命科学と理工学の融合境界領域～に拡大しました。併せて、名称も「公益財団法人 中谷財団」と変更しました。

社会のニーズを的確に捉え、柔軟に、タイムリーに実行すること…。

中谷財団は、時代の一步先を見つめ、民間の法人だからこそできる価値ある活動をこれからも続けてまいります。

矢富 裕理事長 挨拶

メッセージ 1

矢富 裕理事長 挨拶 3

中谷財団の事業活動 5

中谷財団の活動背景と実績 5

表彰事業[神戸賞・中谷賞] 9

助成事業[事業ピラミッド] 13

助成事業[長期大型研究助成] 15

助成事業[特別研究助成] 16

助成事業[開発研究助成] 16

助成事業[奨励研究助成] 17

助成事業[調査研究助成] 17

助成事業[交流助成] 18

助成事業[大学院生奨学金給付] 19

助成事業[国際学生交流プログラム] 20

助成事業[科学教育振興助成] 21

中谷財団の歴史 23

TOP MESSAGE

矢富 裕理事長 挨拶

「日本を創造する「オリジナリティー」の育成」

The Future of the Nakatani Foundation

設立40周年、次世代への貢献と展望

私ども中谷財団は、1984年4月、「財団法人 中谷電子計測技術振興財団」としてその産声を上げました。これは、東亜医用電子株式会社（現・シスメックス株式会社）の創業者であり、初代理事長を務めた故中谷太郎が抱いた、「未来社会において日本が強靱な産業基盤を確立し、持続的な発展を遂げるためには、電子計測技術の深化が不可欠である」という、先見性に満ちた強い信念を起点としています。

1983年に医師としての歩みを開始した私自身が、がむしゃらに取り組んだ臨床の中で発生した疑問を解決すべく研究の必要性・重要性を感じ始め、また、同時に血液学を専門と定め、電子計測技術に関連した研究にも着手した頃に本財団がスタートしたということになります。40年という星霜を経て、科学技術のパラダイムが大きく変容する中で、歴史ある当財団の舵取りを担うこととなった巡り合わせに、深い機縁と重責を噛み締めております。

設立から今日にいたるまでの40年間、当財団は刻々と変化する社会の要請に即応しながら、その活動を重層的かつ多角的に広げてまいりました。

2012年には公益法人制度改革に伴い、「公益財団法人 中谷医工計測技術振興財団」として再出発。



同時期に、設立者の子息である故中谷正理事から多大なる遺贈を賜ったことは、当財団にとって大きな転換点となりました。これにより、国内屈指の助成規模を誇るプラットフォームへと進化を遂げ、最先端の学術研究から次世代を担う科学者の萌芽の育成まで、包括的な支援を展開する礎が築かれたのです。

そして設立40周年を迎えた2024年、私たちはさらなる発展のため、大きな決断をいたしました。

活動の主座を、生命科学と理工学の昇華を目指す「BME (Bio Medical Engineering) 分野」へと拡大し、名称も現在の「公益財団法人 中谷財団」へと刷新いたしました。

かつて日本が世界を席卷した原動力は、他者の追随を許さない「独創性 (Originality)」と、それを具現化する緻密な「技術力 (Technology)」の融合にありました。

しかし現在、種々の社会的要因により我が国の研究力は低下してきていることは、多くの客観的指標が示すところです。とくに、研究者の研究環境をより良いものにすることの必要性は論を俟ちません。私たちは、現状を打開するため、既存の枠組みを刷新する「新しい力」が、そのポテンシャルを最大限に発揮し、破壊的イノベーションを創出するため

には、制度的・心理的な障壁を取り払った自由な研究環境の再構築が急務と考えています。

技術立国・日本としての力強い再興を目指し、当財団は「表彰事業」と「助成事業」を両輪として活動を展開しています。権威ある「中谷賞」に加え、40周年を機に創設した「神戸賞」では、生命科学と理工学の融合境界領域で独創的な研究実績を挙げた研究者を顕彰しています。特に若手研究者を対象とした「Young Investigator (Y.I.) 賞」を設けたのは、未来に挑む若い才能に光を当て、一石が投じる波紋が次代の潮流となることを企図したものです。

ここで、私たちが定義する「BME」という概念について改めて触れたいと思います。それは決して単なる「医学」と「工学」の表面的な接合ではありません。医学・生物学としての「生命科学」と、物理学や化学の応用のみならず、数学やAI、情報科学をも包摂する広義の「理工学」が、対等な立場で共鳴する「融合」の形を指します。さらに、私たちはあえて「境界」という言葉を強調しています。既成の学問領域の「境界線」こそが、新たな問いが生まれる最も肥沃な領野であり、学際的なアプローチがブレイクスルーをもたらす場であると確信しているからです。高度に複雑化した現代の課題に対し、単一の専門性で立ち向かうことには限界があります。異なる知性が激しく衝突し、やがて深く融合していく境界領域こそが、私たちが支援すべき領域と考えています。

また、当財団の助成事業においてユニークな特長が、支援対象の広範さです。第一線のトップランナーだけでなく、大学院生、大学生、そして小中高生にいたるまでの「知の階梯」をシームレスに支えています。私自身の経験を振り返っても、若いうちに「未知の事象に対し、自ら仮説を立て、真理を解明する」という知的興奮を味わうことは、その後の人生を方向付ける決定的なパラダイムシフトとなると考えています。

日常のどんなに微細な疑問であっても、自律的に問いを立て、解決への道筋を自らの手で論理的に構築していく。そのプロセスで得られる喜びこそが、世界に通用するオリジナリティーの源泉となります。公的な助成金が硬直的にならざるを得ない中で、民間財団である私たちは、その機動性と柔軟性を活かし、まだ形にならない「可能性」に賭けることができます。研究者が時に直面する「孤独な探究」の時間を支え、次世代の才能がのびのびと試行錯誤を続けられる土壌を耕し続けること。それこそが、私たちが果たすべき真の社会的責務であると考えています。

これからの10年、財団設立50周年に向けて、中谷財団は単なる助成機関であることを超え、研究者や教育現場に深く寄り添う共創のパートナーでありたいと願っています。私自身も一人の研究者の視座に立ち、現場が真に求めている支援とは何かを常に問い直し、時代の要請を先取りした細やかなサポートをタイムリーに提供してまいり所存です。その支援が、一人の若者の志を支え、ひいては社会全体の福祉を底上げしていく。この連鎖こそが財団活動の醍醐味に他なりません。

「元気な日本、強い日本」を再構築し、希望ある新しい時代を切り拓く鍵は、個の独創性を信じ、育むことに他なりません。私たちは、次代を担う若い力とともに、日本、そして人類社会の幸福に寄与する未来を創造してまいります。科学の境界領域には、まだ誰も見たことのない風景が広がっています。その未踏の地平へ向けて、私たちは挑戦者たちとともに、一歩ずつ、しかし確かな足取りで歩を進めてまいります。

皆様におかれましては、今後とも当財団の新たな挑戦と活動に対し、変わらぬご厚誼とご指導を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

公益財団法人 中谷財団
理事長 矢富 裕

※BME (Bio Medical Engineering) 分野～生命科学と理工学の融合境界領域～を指し、医工計測技術もこの分野に含まれます。

CONCEPT of NAKATANI

中谷財団の活動背景と実績

「未来を創る力」を支え育てます」

中谷財団は、生命科学と理工学の融合境界領域「BME(Bio Medical Engineering)」の振興を通じ、わが国のイノベーションを力強く牽引しています。

現在、日本の研究開発投資は諸外国に比して停滞が続いており、米国との投資格差は約3.5倍にまで拡大しました。

これに呼応するように、革新の源泉である博士課程進学者数もピーク時から約43%減となるなど、わが国は「知の空洞化」という深刻な危機に直面しています。

私たちはこの現状を打破し、日本の技術的優位性を再構築するため、独創的な研究者への助成拡充と、次世代を担う科学者の育成を最優先課題に掲げています。

活動の背景

活動と実績

BME(Bio Medical Engineering)とは

BME(Bio Medical Engineering)分野～生命科学と理工学の融合境界領域～

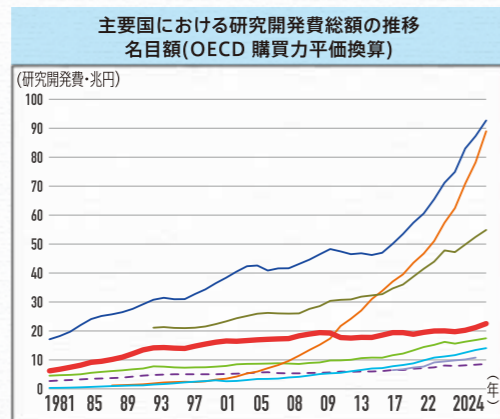
- 医療や人々の健康に貢献しうる独創的でイノベーティブなアプローチを行う研究を対象とします。
 - BMEを補足する言葉として、「生命科学と理工学の融合境界領域」と付記しました。
 - 生物学、医学等を生命科学とし、物理学や化学等の応用を工学としたうえで数学やAIなど情報科学も含むことを明確にする意味で工に理を加えて理工学とし、それらが連携した研究領域が対象であることを示す融合境界領域という言葉で表現しました。
- 医療の発展や健康の増進を見据えた幅広い研究分野において、基礎から応用まで広く対象とします。

3.5

倍

広がる世界との投資格差

2000年代以降、諸外国が研究開発費を劇的に伸ばす一方、日本の伸びは緩慢な状態にあります。主要国との投資格差は顕著で、米国との比較では約3.5倍以上の開きが生じています。この投資の停滞は技術競争力の低下に直結しており、民間財団による機動的な資金投入がかつてないほど重要視されています。



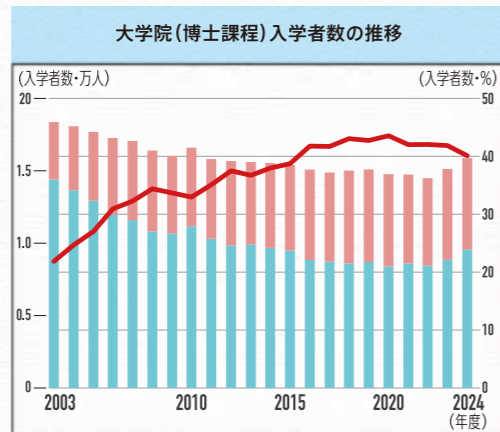
— 日本 — 米国 — ドイツ — フランス — 英国
— 中国 — 韓国 — EU-27

43

%減

枯渇する「博士」という資源

日本の博士課程進学者数は、2003年のピーク時(約1.4万人)から比較して、2022年では約43%(約0.6万人)減となりました。知の最前線を切り拓く博士号取得者の減少は、イノベーションの「種」の喪失を意味します。若き研究者が未踏の領域に安心して挑める環境を整えることは、もはや国家的な急務です。



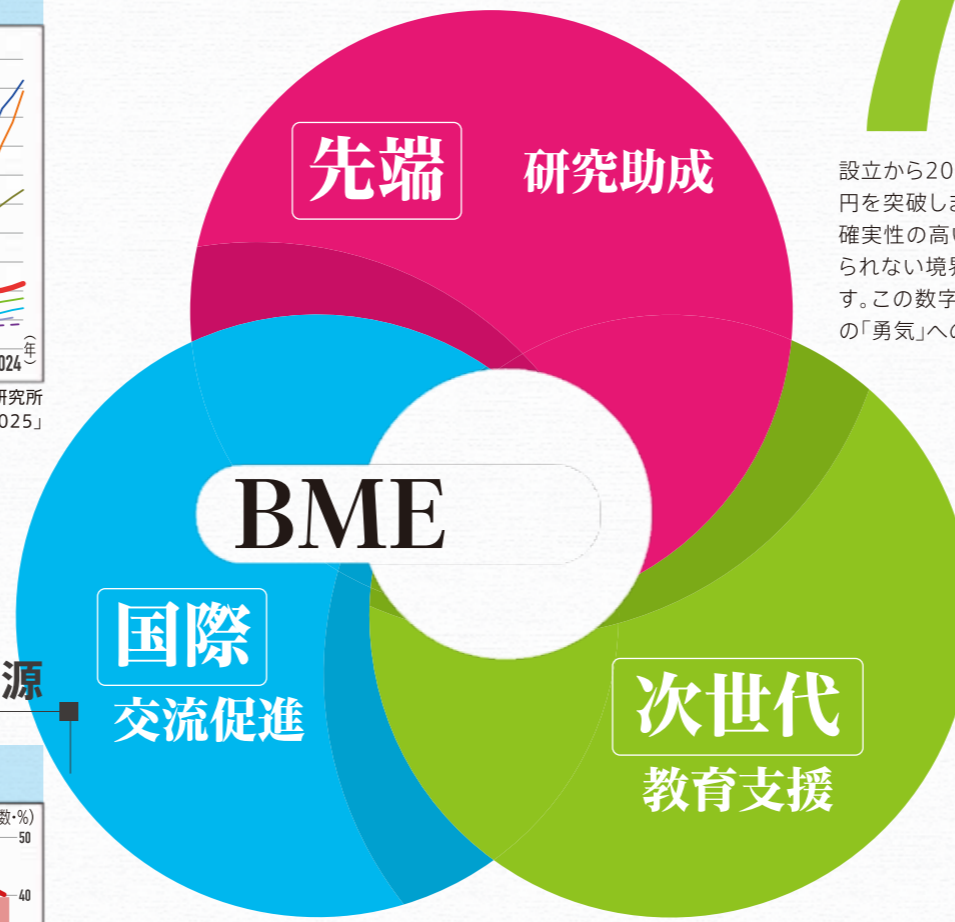
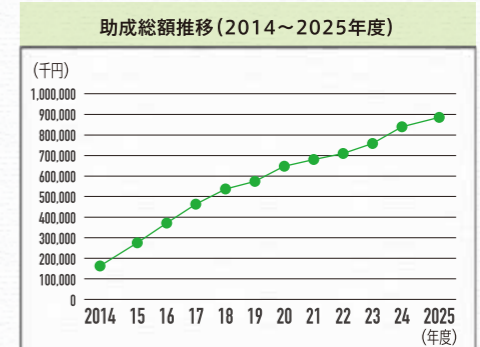
■ 社会人 ■ 社会人以外 ■ 社会人割合

71

億円超

未来への投資、その積み上げ

設立から2025年度までの累計の助成金額は71億円を突破しました。単なる資金援助に留まらず、不確実性の高い萌芽的研究や、既存の学問領域に縛られない境界領域の研究を優先的に支援しています。この数字は、日本が再び世界をリードするための「勇気」への投資に他なりません。

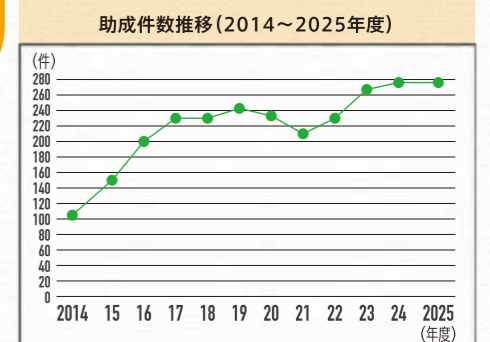


3,000

件以上

繋がる知の循環

当財団の総助成件数は累計3,000件を超えました。子どもたちが最新の機材に触れ科学の喜びを知る機会から、未踏の領域に挑む研究者支援まで、その輪は広がっています。教室で「問い」を立てた少年少女が、やがて次代のイノベーションを牽引するトップランナーへ成長する。私たちは助成を通じ、この知の循環を力強く支え続けます。



50

周年

知の継承、その先にある50年へ

未来展望 2034年の創立50周年に向け、私たちは「知の循環」をさらに加速させます。これまでに蒔かれた3,000を超える科学の芽を、次代を担う大きな樹へと育て上げること。そして、境界なき研究支援を通じて、次の半世紀をリードするイノベーションを創出し続けること。50周年という節目は、通過点に過ぎません。私たちの情熱は、まだ見ぬ未来の科学者たちと共にあります。

PROJECTS

公益財団法人 中谷財団

事業活動

事業の概要

中谷財団では、BME分野の先導的な技術開発はもとより、それらに関わる人たちの豊かな人材育成を目的として、「表彰事業」と「助成事業」の2つの事業で、我が国と国際社会の発展および人々の生活を向上させ、「人と社会の豊かな未来」の実現を目指しています。

中谷財団の基本事業

表彰事業



神戸賞 [大賞]・[Young Investigator賞(Y.I.賞)]

P9

BME (Bio Medical Engineering) 分野～生命科学と工学の融合境界領域～においてイノベーションをもたらす研究で実績を挙げた研究者や、ユニークな研究で将来性が囑望される若手研究者の表彰。



中谷賞 [大賞]・[奨励賞]

P11

医工計測技術分野における技術開発に顕著な業績をあげた研究者の表彰

情報の収集および提供事業



BME分野における情報の収集および提供

BME (Bio Medical Engineering) 分野～生命科学と工学の融合境界領域～における研究論文をはじめ、研究・技術の動向等の情報収集および共有の活性化。

助成事業



研究助成事業 [長期大型研究助成]・[特別研究助成]・[開発研究助成] [奨励研究助成]・[調査研究助成]

P15

BME (Bio Medical Engineering) 分野～生命科学と工学の融合境界領域～における研究・開発に対する助成



交流助成事業 [交流プログラム]・[留学プログラム]

P18

BME (Bio Medical Engineering) 分野～生命科学と工学の融合境界領域～における研究・開発に関する交流に対する助成



奨学金給付事業 [大学院生奨学金給付]

P19

BME (Bio Medical Engineering) 分野～生命科学と工学の融合境界領域～における大学院生に対する奨学金の給付



国際学生交流プログラム

P20

国内外の理系学生の短期研究留学に対する助成



科学教育振興助成事業 [個別校助成]・[複数校連携助成] [教員支援助成] [次世代理系人材育成プログラム助成]

P21

小中高校生の科学教育振興に対する助成

NAKATANI PROJECTS

中谷財団の事業

「表彰事業」

Commendation Projects

中谷財団は、医工計測技術の発展を通じて豊かな未来の創造を目指してきました。そのため、表彰事業を通して、先進の技術を世に知らしめるとともに有望な人材を積極的に評価し、育成へと連携させながら対象領域をBME分野へ拡大し、研究者の裾野拡大を促進させます。

研究者の発展と技術の促進へ



「第2回 神戸賞 授賞式」



BME研究者への広範な表彰

神戸賞

中谷財団では、財団設立40周年を機に新たなる表彰事業である神戸賞を創設いたしました。BME (Bio Medical Engineering) 分野～生命科学と工学の融合境界領域～において、独創的な研究で「日本を元気にする」ことへの貢献が期待される日本人研究者を対象とします。



第2回 神戸賞 授賞式 (2025年5月25日開催)



Young Investigator賞 (Y.I.賞) 選考シンポジウム (2026年1月17日開催)

対象研究分野

BME (Bio Medical Engineering) 分野～生命科学と工学の融合境界領域～

医療や人々の健康に貢献しうる独創的でイノベティブなアプローチを行う研究で、基礎から応用まで広く対象とします。

神戸賞 大賞

5,000万円 1件

副賞

トロフィー

候補者は以下の条件を満たす日本人研究者 (海外で活躍する日本人研究者を含みます)

対象研究分野において、独創的な発想に基づいたイノベティブな研究成果を上げ、現在も活発な研究活動をおこなっている研究者または研究グループ

大賞の最終候補者に選考された場合には、12月中旬に開催される審査委員会にて、オンラインでのヒアリングを実施します。

神戸賞 Young Investigator賞 (Y.I.賞)

500万円 3名以内

副賞

研究助成金を5年間で4,000万円・トロフィー

候補者は以下の条件を満たす日本人研究者 (海外で活躍する日本人研究者を含みます)

- ① 対象研究分野において独創的な研究を実施しており、その将来性が囑望される若手研究者
- ② 2026年度末において45歳未満であること (但し、ライフイベントにより研究から離れた期間を考慮します)

Y.I.賞の最終候補者に選考された場合には、1月下旬に東京で開催されるY.I.賞選考シンポジウムに参加いただき、発表および討論を行います。

「神戸賞」のトロフィー



神戸賞のトロフィーデザインのモチーフは「照らす人」。これは、独創的な研究を進める人を「誰もが進んだことのない未知なる領域を、まるで暗闇に光を照らしながら進む人」として例えたものです。ここでの「光」とは研究者の独創そのものでもあり、その研究が先に進む未来を照らす「光」でもあります。合金の彫像铸造に、実際に発光する構造を組み込んだユニークなものです。独創の象徴である「照らす人」が文字通り光を放ち、受賞者とその研究の独創性を大いに讃えるものになっています。

[第3回 神戸賞 受賞者]

第3回 神戸賞 [大賞] 受賞



理化学研究所脳神経科学研究センター 細胞機能探索技術研究チーム チームディレクター

宮脇 敦史 氏

第3回 神戸賞 [Young Investigator賞 (Y.I.賞)] 受賞



理化学研究所開拓研究所 主任研究員

川口 喬吾 氏



東京科学大学 生命理工学院 教授

藤枝 俊宣 氏



理化学研究所脳神経科学研究センター チームディレクター

竹岡 彩 氏

神戸賞歴代受賞者

	大賞	Young Investigator賞 (Y.I.賞)
第1回	東京大学大学院 薬学系研究科 同医学系研究科 教授 浦野 泰照 「オリジナル蛍光プローブの精密開発とその活用による、革新的生体・医療イメージング技術の創製」	大阪大学大学院 医学系研究科 教授 武部貴則
		東京大学 先端科学技術研究センター 准教授 太田慎生
		東京大学 先端科学技術研究センター 教授 加藤英明
第2回	東京大学大学院 理学系研究科 教授 菅 裕明 「特殊ペプチド創薬の開拓とイノベーション」	The University of British Columbia, Professor/Director of Research 谷内江 望
		京都大学 高等研究院ヒト生物学高等研究拠点 教授 村川泰裕
		東京科学大学 総合研究院化学生命科学研究科 教授 神谷真子
第3回	理化学研究所脳神経科学研究センター 細胞機能探索技術研究チーム チームディレクター 宮脇 敦史 「光と生命との相互作用の探究から革新する バイオイメージング」	理化学研究所開拓研究所 主任研究員 川口喬吾
		東京科学大学 生命理工学院 教授 藤枝俊宣
		理化学研究所脳神経科学研究センター チームディレクター 竹岡 彩

※所属機関、職位は授賞当時のものです。複数の所属がある方は代表的なものの一つ表記しています。

[神戸賞審査委員会]

審査委員長

筑波大学 国際統合睡眠医科学研究機構 機構長 教授
柳沢 正史

審査委員

慶應義塾大学 医学部 医化学教室 教授
佐藤 俊朗

理化学研究所 脳神経科学研究センター 多階層精神疾患研究チーム チームディレクター
林 朗子

審査副委員長

京都大学大学院 医学研究科 腫瘍生物学講座 教授
小川 誠司

東京大学大学院 工学系研究科 電気系工学専攻 教授
染谷 隆夫

慶應義塾大学 医学部 微生物学・免疫学教室 教授
本田 賢也

審査委員

創価大学 糖鎖生命システム融合研究所 副所長 教授
木下 聖子

東北大学 多元物質科学研究所 有機・生命科学研究部門 教授
永次 史

九州大学大学院 工学研究院 化学工学部門 教授
三浦 佳子

京都大学 高等研究院 ヒト生物学高等研究拠点 教授
斎藤 通紀

東京大学 大学院 理学系研究科 生物科学専攻 教授
淵木 理

大阪大学大学院 工学研究科 電気電子情報通信工学専攻 教授
森 勇介

※審査委員長、審査副委員長のほかは50音順

医工計測技術研究者への表彰

中谷賞

医工計測技術分野における技術開発の
飛躍的な発展を期し、顕著な業績をあげた研究者を表彰することを目的として、
「中谷賞(大賞・奨励賞)」を設定しています。



【第18回 中谷賞 受賞者】

第18回 中谷賞[大賞]受賞

第18回 中谷賞[奨励賞]受賞



東京大学大学院 工学系研究科
化学生命工学専攻 教授
山東 信介氏

東北大学大学院 理学研究科
化学専攻 准教授
佐藤 雄介氏

東京科学大学 物質理工学院
材料系 准教授
相良 剛光氏

対象研究分野

生体、その構成体(分子、細胞小器官、細胞、臓器等)および薬物動態を対象にした計測技術、情報解析技術等に関する研究であり、
医療、健康管理、介護等に関して有用な情報を与えるもの。

中谷賞 大賞

1,000万円 1名

表彰対象者は以下の条件を満たす研究者となります

- ① 医工計測技術について優れた業績を挙げ、現在でも活発な研究活動を行っている研究者であること。
- ② 表彰対象研究分野に関連する学会の会員または大学およびこれに準ずる研究機関に属する者または属していた者。

中谷賞 奨励賞

300万円 2名

表彰対象者は以下の条件を満たす研究者となります

- ① 医工計測技術について独創的な研究をしていること。
- ② 将来有望な研究者で、原則として2027年3月末日時点で45歳以下であること。
- ③ 表彰対象研究分野に関連する学会の会員または大学およびこれに準ずる研究機関に属する者または属していた者。

「中谷賞」の受賞メダル



中谷財団では、中谷賞を価値あるものにするべく、メダルのデザインにおいても財団独自の想いを込め、授与を行なっています。
真円となっている形状は「研究と技術の円満な発展」を意味しており、月桂樹の冠は「研究の達成」を表すとともに、「研究者の榮譽」を賞しています。



中谷賞歴代受賞者

※所属機関、職位は授賞当時のものです。

	大賞	奨励賞	
第1回	東北大学大学院 工学研究科 電子工学専攻 教授 金井 浩 「超音波マイクロスコプの開発と 生体組織性状診断への応用に関する研究」		
第2回	大阪大学大学院 基礎工学研究科 機能創成専攻生体工学領域 准教授 橋本 守 「コヒーレントラマン散乱顕微鏡による 生体分子の無染色な高解像・高速観測」		
第3回	金沢工業大学 先端電子技術応用研究所 准教授 足立善昭 「生体磁場計測と空間フィルタ法による 非侵襲脳機能イメージングの開発」		
第4回	東京医科歯科大学 生体材料工学研究所 システム部門制御分野 准教授 松元 亮 「トランジスタによる非破壊細胞診断法の開発と “デバイ長フリー”な信号変換機序の実証」		
第5回	東北大学 多元物質科学研究所 教授 百生 敦 「生体軟組織を可視化するX線位相イメージング 技術の開発とその医用画像機器への応用展開」		
第6回	静岡大学 電子工学研究所 生体計測研究部門 教授 川田善正 「電子線励起微小光源を用いた 超解像光学顕微鏡の開発」	大阪大学大学院 工学研究科 精密科学・応用物理学専攻 准教授 藤田克昌	東京大学大学院 薬学系研究科 薬品代謝化学教室 准教授 花岡健二郎
第7回		東京大学大学院 工学系研究科 応用化学専攻 教授 野地博行	京都大学 iPS細胞研究所 初期化機構研究部門 教授 齊藤博英
		大阪大学 産業科学研究所 第1研究部門(情報・量子科学系) 教授 関谷 毅	
第8回	大阪大学大学院 工学研究科 教授 民谷栄一 「ナノ・マイクロデバイスを用いた バイオセンサーの実用化に関する先導的研究」	京都大学大学院 医学研究科 准教授 木内 泰	慶應義塾大学 理工学部 准教授 牛場潤一
第9回	東京大学大学院 新領域創成科学研究科 特任教授 杉浦清了 「生体の多階層の計測データを統合し新たな情報を 生み出す心臓シミュレータ“UT-Heart”の開発」	東京大学 生産技術研究所 教授 竹内昌治	大阪大学 国際医工情報センター 臨床神経医学・寄附研究部門 講師 柳澤琢史
第10回	京都大学大学院 医学研究科 人間健康科学系専攻 教授 椎名 毅 「組織性状・機能情報の新規イメージング技術の 先駆的研究と超音波エラストグラフィの開発」		
	京都大学大学院 生命科学研究所 教授 松田道行 「細胞内情報伝達分子の活性を 生きた動物で可視化する技術の開発」		
第11回	東京大学大学院 工学系研究科 教授・理化学研究所チームリーダー 染谷隆夫 「伸縮性エレクトロニクスによる 生体情報計測の先駆的研究」	京都大学大学院 生命科学研究所 准教授 今村博臣	東京大学大学院 工学系研究科 教授 山東信介
第12回	東京大学大学院 工学系研究科 教授 野地博行 「デジタルバイオ分析法」	金沢大学 新学術創成研究機構 准教授 高橋康史	東北大学大学院 工学系研究科 准教授 伊野浩介
		理化学研究所 生命機能科学 研究センター チームリーダー 城口克之	
第13回		慶應義塾大学 理工学部 システムデザイン工学科 教授 須藤 亮	名古屋大学大学院 工学研究科 准教授 安井隆雄
第14回	東京大学大学院 薬学系研究科 教授 浦野泰照 「化学蛍光プローブの精密開発に基づく、 革新的生体・医療イメージング技法の創製」	東京大学大学院 理学系研究科 生物科学専攻 教授 上村想太郎	東京大学 先端科学技術研究センター 准教授 太田禎生
	東海大学 医学部内科 学系循環器内科学 教授 後藤信哉 「個別最適化治療を可能とする 医工計測情報の革新的多次元解析技術の開発」		
第15回	大阪大学 産業科学研究所 教授 永井健治 「革新的生物発光タンパク質の開発と 生理機能計測の先駆的研究」	理化学研究所 脳神経科学研究センター 触覚生理学研究チーム チームリーダー 村山正宜	京都大学 高等研究院 教授 谷口雄一
第16回	理化学研究所 生命機能科学研究 センター 細胞極性制御研究チーム チームリーダー 岡田康志 「一分子・超解像蛍光顕微鏡法の開発と細胞生物学研究への応用」	九州大学大学院 医学研究院 教授 今井 猛	理化学研究所 主任研究員 渡邊力也
第17回	浜松医科大学 細胞分子解剖学講座 教授 瀬藤光利 「質量分析を用いた空間オミクス分野の最先端とその応用、国際マスマイミ センター共用プラットフォーム工システムの創成―質量顕微鏡法の開発と応用展開―」	名古屋大学 大学院医学系研究科 特任講師 佐藤和秀	京都大学 医生物学研究所 生命システム研究部門 教授 新宅博文
第18回	東京大学大学院 工学系研究科 化学生命工学専攻 教授 山東信介 「革新的核偏極MRI分子プローブ群の創出 ―生体代謝イメージング・疾患診断への展開―」	東北大学大学院 理学研究科 化学専攻 准教授 佐藤雄介	東京科学大学 物質理工学院 材料系 准教授 相良剛光

「助成事業」

BME分野の促進と人材育成

中谷財団は、BME (Bio Medical Engineering) 分野～ 生命科学と理工学の融合境界領域～の発展を通じて豊かな未来の創造を目指しています。
そのため、先導的開発・技術の交流・研究者の裾野拡大等、BME分野の広汎な発展を促進し、有望な人材を未来へ送り出すため、研究者を顕彰する表彰事業および、対象となる研究等を広く公募する助成事業を行っています。

未来のための研究の発展を



Nakatani's Policy

SIGNIFICANCE

BME分野の広範な発展を促進

積極的な独自性や
創造性の成長を促進

多様な人材育成を促進し
理解を育む

世界を知り世界を意識した
活動力の育成

助成事業

対象: 研究者

対象: 若手研究者

対象: 大学院生

対象: 大学生

対象: 小中高校生

[研究助成事業] BME分野における研究・開発に対する助成

長期大型研究助成	将来的に新しい技術や学術・応用分野を拓き次代を担うグローバルに活躍できる若手研究者の育成に資することを目的に助成します。
特別研究助成	基盤となる開発研究を進展させ、実用化が見込まれる研究成果の創出に資する研究に対して助成を行います。
開発研究助成	独創的な発想に基づく研究であって、実用化が期待できる技術またはそれに寄与することができる研究に対して助成を行います。
奨励研究助成	独創的な発想に基づく夢のある研究であって、将来の実用化に向けた基盤技術として期待される研究に対して助成を行います。
調査研究助成	基盤医学・臨床医学における計測技術の有用性、活用状況、必要性、可能性、研究動向などの調査研究に対して助成を行います。

[交流助成事業] BME分野における研究・開発に関する交流に対する助成

交流プログラム	海外派遣/日本招聘	国内外の研究者の交流を通じて対象研究分野の発展に寄与する活動に助成するプログラムです。海外の学会などで発表する、国内の学会などに海外の研究者を招聘する、海外の研究機関へ私費留学する、日本の研究機関へ私費留学するための費用の一部を助成します。
留学プログラム	海外留学/日本留学	

[奨学金給付事業] BME分野における大学院生向け奨学金の給付

大学院生奨学金給付	BME (Bio Medical Engineering) 分野～ 生命科学と理工学の融合境界領域～において博士号の取得を目指す、日本の大学院(博士前期・後期課程、一貫制博士課程)に入学予定または在籍中の大学院生(留学生は除く)を対象に、返済の必要のない奨学金を前期・後期課程を通して給付します。
-----------	--

[科学教育振興助成事業] 大学生の国際交流等に対する助成

国際学生交流プログラム	Nakatani RIESプログラム/アドバンスプログラム	将来グローバルに活躍する研究者・技術者を目指す日米の理系学部学生を選抜し、リサーチインターシップの機会を提供します。学部学生が海外の大学の研究室で研究を体験できるユニークなプログラムです。
-------------	-------------------------------	--

[科学教育振興助成事業] 小中高校生の科学教育振興に対する助成

個別校助成	複数校連携助成	素直な「なぜ」という心を大切に、科学に対する興味を伸ばし、論理的思考力や創造性を育むための取組みを支援します。 また、新設された次世代系人材育成プログラム助成では、大学や高等専門学校が企画する、科学技術への関心が高い中学生の多様な興味関心を汲み取って伸ばす体系的なプログラムに対して助成する事業となっています。
教員支援助成		
次世代系人材育成プログラム助成		



PROJECTS

[研究助成事業] BME分野における 研究・開発に対する助成

研究助成

長期大型研究助成 特別研究助成 開発研究助成 奨励研究助成 調査研究助成

BME分野の研究に関して、将来新しい基盤を生み出す研究への助成

2026年度 研究助成
贈呈式

長期大型研究助成

[最大5年間助成]



BME分野において、将来的に新しい技術や学術・応用分野を拓くための基盤の創成、およびグローバルに活躍できる若手研究者の育成を目的とする長期大型研究に対して行う助成です。

対象研究分野

BME (Bio Medical Engineering) 分野
～生命科学と理工学の融合境界領域～
医療や人々の健康に貢献しうる独創的でイノベティブなアプローチを行う研究・開発において、基礎から応用まで広く対象とします。

応募資格

国内外の大学およびこれに準ずる研究機関に属する者
かつ設立する研究部門の所属する組織の協力が得られる者
※各大学・研究機関からの応募は1件に限りますが、各部署からは1件とします。
※当財団の他の研究助成への重複応募はご遠慮ください。
※当財団の表彰事業への推薦があった場合、調整させていただくことがあります。

助成金額

3億円/5年
年間最大6,000万円を最長5年間(総額3億円)

募集期間

6月上旬～8月下旬
隔年募集。2026年度の募集はありません。

助成対象

対象研究のさらなる発展のため、国内外の人材交流による先進的な研究や既存の枠を超えた融合的な研究により、将来的に新しい技術や学術・応用分野を拓くための基盤を生み出すとともに次代を担うグローバルに活躍できる若手研究者の育成に資する研究。



特別研究助成

[2年間助成]



基盤となる開発研究を一層発展させることにより、卓越した成果が期待でき、かつ実用化が見込まれる研究成果の創出に資する研究に対して行う助成です。

対象研究分野

BME (Bio Medical Engineering) 分野
～生命科学と理工学の融合境界領域～
医療や人々の健康に貢献しうる独創的でイノベティブなアプローチを行う研究・開発において、基礎から応用まで広く対象とします。

応募資格

日本国内の大学およびこれに準ずる研究機関に属する者。
募集翌年の3月末日時点で日本国内の研究機関に所属していること。

助成金額

3,000万円
2年間で最大3,000万円(年間最大2,000万円の助成可)

募集期間

6月上旬～7月中旬
(日程は変更する場合があります)



[特別研究助成] ジョンホプキンス大学 井上尊生 教授

開発研究助成

[2年間助成]



独創的な発想に基づく研究であって、実用化が期待できる技術の開発または実用化に寄与することが期待できる研究に対して行う助成です。

対象研究分野

BME (Bio Medical Engineering) 分野
～生命科学と理工学の融合境界領域～
医療や人々の健康に貢献しうる独創的でイノベティブなアプローチを行う研究・開発において、基礎から応用まで広く対象とします。

応募資格

日本国内の大学およびこれに準ずる研究機関に属する者。
募集翌年の3月末日時点で日本国内の研究機関に所属していること。

助成金額

600万円
2年間で最大600万円

募集期間

6月上旬～7月中旬
(日程は変更する場合があります)



[開発研究助成] 16件の研究に贈呈を行いました。

奨励研究助成

[2年間助成]



若手研究者の育成を目的とし、独創的な発想に基づく夢のある研究であって、将来の実用化に向けた基盤技術として期待される研究に対して行う助成です。

対象研究分野

BME (Bio Medical Engineering)分野
～生命科学と理工学の融合境界領域～
医療や人々の健康に貢献しうる独創的でイノベティブなアプローチを行う研究・開発において、基礎から応用まで広く対象とします。

応募資格

日本国内の大学およびこれに準ずる研究機関に属する者。
募集翌年の3月末日時点で日本国内の研究機関に所属していること。
(若手研究者の育成を目的とした助成のため、研究責任者の年齢は募集翌年の3月末日時点で40歳未満であること)

助成金額

300万円
2年間で最大300万円

募集期間

6月上旬～7月中旬
(日程は変更する場合があります)



[奨励研究助成] 24件の研究に贈呈を行いました。

調査研究助成

[2年間助成]



基礎医学または臨床医学における計測技術の有用性、活用状況、必要性、可能性、研究動向などの調査研究に対して行う助成です。

対象研究分野

BME (Bio Medical Engineering)分野
～生命科学と理工学の融合境界領域～
医療や人々の健康に貢献しうる独創的でイノベティブなアプローチを行う研究・開発において、基礎から応用まで広く対象とします。

応募資格

日本国内の大学およびこれに準ずる研究機関に属する者。
募集翌年の3月末日時点で日本国内の研究機関に所属していること。

募集期間

6月上旬～7月中旬
(日程は変更する場合があります)

研究体制：国内外を問わず、複数の研究機関または幅広い専門分野や地域の研究者が参加する体制とする(ただし、単独での実施が可能な場合も申請可とする)

手法例：実態調査(フィールド調査など)、追跡調査(コホート研究など)、統計解析など

助成金額

300万円
2年間で最大300万円



[調査研究助成] 4件の研究に贈呈を行いました。

PROJECTS

[交流助成事業]

BME分野における 研究・開発に関する 交流に対する助成

交流プログラム | 海外派遣/日本招聘 | 留学プログラム | 海外留学/日本留学

国際交流を通して大学院生・研究者の技術向上を促進

交流助成

[1週間～3年間助成]



国内外の研究者の交流を通じてBME分野の発展に寄与する活動に助成するプログラムです。海外の学会等で発表する、国内の学会等に海外の研究者を招聘する、海外の研究機関へ私費留学する、日本の研究機関へ私費留学するための費用の一部を助成します。

交流プログラム[海外派遣]

海外で開催される国際会議・学会等に参加し、研究発表等を行うとともに海外の専門家と交流を行い、BME分野の発展に貢献する研究者、技術者を対象とした助成です。(大学院生を含む・40歳以下)

交流プログラム[日本招聘]

国内で開催される国際学会・学会にてご講演いただくことを目的に海外から研究者、技術者等を招聘するものです。国内の専門家と交流を促進し、BME分野の発展に貢献する者を対象とした助成です。(1申請最大3名)

助成内容

- 助成期間：原則として、1週間を限度とします。
- 助成経費：原則として渡航費および宿泊費を対象とします。
- 助成件数：特に定めず、申請状況等によることとします。

助成内容

- 助成期間：原則として、1週間を限度とします。
- 助成経費：原則として渡航費および宿泊費を対象とします。
- 助成件数：特に定めず、申請状況等によることとします。

助成金額

40万円まで

助成金額

50万円まで
(被招聘者1人につき)

留学プログラム[海外留学]

海外の大学や研究機関に私費留学し、BME分野の発展に貢献する研究者、技術者を対象とした助成です。海外の大学院博士後期課程に進学する場合も対象とします。

留学プログラム[日本留学]

外国籍で日本の大学や研究機関に私費留学し、BME分野の発展に貢献する研究者、技術者を対象とした助成です。(大学院生を含む・40歳以下)

助成内容

- 助成期間
[短期留学]
1カ月以上、最大11カ月間とします。
[長期留学]
研究目的で、1年以上、最大3年間とします。
- 助成経費
滞在費および渡航費を対象とします。
- 助成件数
特に定めず、申請状況等によることとします。

助成内容

- 助成期間
研究または研修目的で、1年以上、最大2年間とします。
- 助成経費
滞在費を対象とします。
- 助成件数
特に定めず、申請状況等によることとします。

助成金額

月額**50万円**まで [年間600万円+渡航費30万円(上限)]
原則、滞在費として月額50万円の助成ですが、留学先より、ビザ取得申請に必要な外部資金が提示されている場合は、必要な書類等を提出の上、審査にて検討します。

助成金額

月額**20万円**まで [年間240万円]

PROJECTS

[奨学金給付事業]

BME分野における

大学院生向け奨学金の給付

大学院生奨学金給付

BME分野で博士号取得を目指す大学院生に対する奨学金



大学院生奨学金給付

[給付型奨学金]



BME分野の技術向上に寄与し、将来グローバルに活躍する優秀な人材育成を目的に、博士号の取得を目指す博士前期・後期課程の大学院生を対象に給付を行う、返済の必要のない奨学金制度です。

給付金額

博士前期課程：月額**12万円**
博士後期課程：月額**20万円**

給付期間

給付開始時より博士号取得までの最低年限

博士前期課程：最長**2年間**
博士後期課程：最長**3年間**
(4年課程の場合は4年間)

※ 博士前期・後期課程を通して最長5年間(または6年間)給付します。

募集期間

4月上旬～5月下旬
(日程は変更する場合があります)

応募資格

BME分野において博士号の取得を目指すとともに、取得後に実現したいビジョンを描き、その実現に向けて日本の大学院(博士前期・後期課程、一貫制博士課程)に入学予定または在籍中の者。

- ※ 学部4年生(当年度秋、来年度春に大学院入学予定の者)の応募も歓迎
- ※ 入学予定者の場合は、入学後に給付を開始
- ※ 奨学金給付対象期間が1年以上の者
- ※ 日本国籍または日本の永住権を有する者
- ※ 日本学生支援機構等、公的な奨学金との併給は可能
(ただし、他制度との併給に制限がある場合は、規定に従うこと)
- ※ 民間の奨学金との併給不可(併給は可)

奨学生の義務

各年度末に報告書および学業成績証明書を提出すること。
受給終了時には終了報告書を提出するものとします。
なお、報告書は財団のホームページ等で公開する場合があります。
財団の実施する贈呈式や交流会等への出席、同窓会への参加等をお願いすることになります。

奨学生の声

[奨学生に寄り添った手厚く温かい奨学金支援制度]



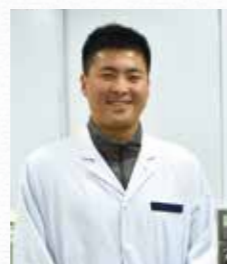
私は、博士後期課程1年次に本奨学金制度に採用いただき、博士号取得までの手厚い経済的支援のみならず、奨学生同士や医工計測分野の研究者との交流機会など、常に奨学生に寄り添ってサポートして下さる温かいご支援をいただきました。環境や分野の異なる方々と交流できることは、研究遂行や

キャリア形成において、大変貴重な機会となりました。
現在は、信州大学にて混相流に関する研究・教育に従事しており、OGとなった今も交流会への参加機会があり、たくさんの刺激をいただいております。
これからBME分野において博士号取得を目指す方々には、是非とも本奨学金制度にご応募いただき、ご自身の夢や未来を切り拓く第一歩としていただきたいと思います。

信州大学 学術研究院 工学系 助教

川口 美沙 (Misa Kawaguchi, 2019～受給 京都工芸繊維大学大学院)

[研究者の道を定め、仲間と出会えた奨学金制度]



博士後期課程に進学したことをきっかけに本奨学金に応募いたしました。完全給付型で負担や義務が少ない本奨学金により、博士を取得するまで研究に専念することができました。また、本奨学金は経済的な不安を和らげてくれただけでなく、奨学生が集う会などを通じてたくさんの方との出会いがありました。

Biomedical engineering分野の発展というミッションのもとに集まった研究者たちと、研究テーマやキャリア、実験での悩みなどを共有できただけでなく、食事をしたり、ランニングする仲間もできました。振り返れば、私が一研究者としてのキャリアを歩み始めることができたのも本奨学金のおかげであると痛感します。研究者を目指す皆さんもぜひ奮って応募してみてください!

米国・カリフォルニア大学ロサンゼルス校バイオエンジニアリング学科
Postdoctoral Fellow

中川 悠太 (Yuta Nakagawa, 2020～受給 東京大学大学院)

PROJECTS

[科学教育振興助成事業]

理系学部生の国際交流等に対する助成

国際学生交流プログラム | Nakatani RIESプログラム/アドバンスプログラム

日本から、そして世界から。大学生の為の双方向短期リサーチインターンシップ



国際学生交流プログラム

[短期海外留学]



理系学部学生が海外の大学研究室を体験できる短期留学プログラムです。日本の学部生の海外でのリサーチインターンシップだけでなく、米国の学部生が日本に研究留学し、日米学生が交流するユニークな短期留学プログラムです

対象者

日本の大学に所属する理系学部の大学生(応募時点で1年生～3年生)特に1年生、2年生(留学時点で2年生、3年生)の応募を期待します。

条件

- ①日本国籍または永住権を有すること。
- ②大学で研究を行うために十分な英語力。
英語試験のスコア提出または、受験。(費用は財団が負担します)

募集期間

1月上旬～2月下旬
(日程は変更する場合があります)

留学期間

夏季(Nakatani RIES)

8月上旬～9月下旬
渡航前に国内オリエンテーションを、帰国後に成果発表会を実施します。

春季(アドバンスプログラム)

翌年**1月下旬～5月上旬**
(最大3カ月間)

プログラム内容

- 渡航前オリエンテーション(国内)
- 渡航先大学でのオリエンテーション
- 渡航先大学等の研究室におけるリサーチインターンシップ
- 渡航先大学等での成果発表(Poster Session等)
- 帰国後の成果発表会(国内)
- 翌年行われるアドバンスプログラムへの参加
(優秀な成績を挙げたものを選抜)

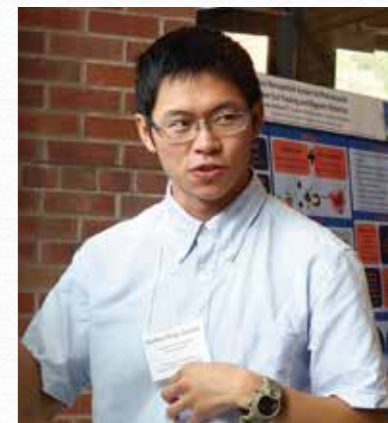
※上記を含め、当財団が指定する全日程に参加することが条件です。

留学生の声

[科学を楽しむ体験がPh.D取得の動機づけに]

Nakatani RIESの留学で最も自分を変化させたのは、アメリカの「科学を楽しむ」文化を体験できたことです。
総じてアメリカでは、ラボ内外、学部生、大学院生を問わず、開放的でフラットな人間関係や交流があり、常に自分の意見を求められます。
意見を述べるのには根拠が必要であり、それが動機となって学生は積極的に論文や教科書を読んで学習しているように感じました。
また、自分の専門外だからと怖気付かず、他の研究に対しても積極的に意見します。こうした社交性が議論を促進し、結果として新しい気付きやイノベーションへと繋がっていると思いました。これが日本とは大きく違った点であり、このような日米の研究環境の違いを学生のうちに体験できたことが大きな刺激となり、私自身の今後のキャリアプランニングにおいて、海外Ph.Dへと立ち向かう動機になりました。

東北大学医学部医学科 3年生(留学当時)
鈴木ラファエルムギ



PROJECTS

[科学教育振興助成事業]

小中高校生の 科学教育振興に対する助成



- 個別校助成
- 複数校連携助成
- 教員支援助成
- 次世代系人材育成プログラム助成

子どもたちの論理性や創造性を伸ばす活動を支援

子どもたちの論理的思考力や創造性の成長を促すため科学教育振興を目的とした小中高等学校における取り組みに対して助成します。
また2023年度より、理数系に優れた資質を持つ中学生を発掘し、多様な興味関心を汲み取って伸ばす体系的なプログラムへの助成を追加しました。

科学教育振興助成



個別校助成 [1年間助成]

助成対象

小学校、中学校、高等学校等において児童生徒が主体的に取り組む科学への関心を高める取組やクラブ活動等。

※本助成は児童生徒が主役となる取組を対象とします。教員が取り組む授業研究や教材開発等は、本助成ではなく「教員支援助成」に応募してください。

募集期間

10月上旬～11月下旬
(日程は変更する場合があります)

応募資格

左記の企画と実施に取り組む小学校、中学校、高等学校等。

※原則、大学や教育センターからの応募はできません。
※高等専門学校は、1～3年生が対象となります。

助成金額

年間最大30万円
(1年間のみ)

複数校連携助成 [2年間助成]

助成対象

小学校、中学校、高等学校等の複数校が連携して、児童生徒が主体的に共同で実施する科学に対する関心を高める2年間の活動。

※本助成は児童生徒が主役となる取組を対象とします。教員が取り組む授業研究や教材開発等は、本助成ではなく「教員支援助成」に応募してください。

募集期間

10月上旬～11月下旬
(日程は変更する場合があります)

応募資格

左記の活動の企画・運営を行う代表校。

※原則、大学や教育センターからの応募はできません。
※高等専門学校は、1～3年生が対象となります。
※2年間継続して活動いただける組織に限ります。

助成金額

年間最大100万円
2年間で最大200万円
(ただし、1年ごとに継続審査をおこないます)

[2025年度 科学教育振興助成 成果発表会]

2025年12月20・21日、東京工科大学において「2025年度 科学教育振興助成 成果発表会」を開催しました。本年度の科学教育振興助成に採択された学校の児童生徒や引率の先生方が集まり、2日間の参加人数はのべ920人以上と過去最高となりました。20日の口頭発表では、発表校48校、聴講校60校の合計348名が参加、小学生による発表も3校あり大変刺激的な発表会となりました。またサイエンスカフェではRIESプログラムの大学生・卒業生との交流会を実施しました。21日は12校538名によるポスター発表を開催。シンシナティ小児病院幹細胞・オルガノイド医療研究センター副センター長 武部貴則先生による「跳ぶように発想、這うように証明!」と題した基調講演のあと、地域や年代を超えた生徒児童によるポスター発表と活発な質疑応答がおこなわれ活気あふれる発表会となりました。参加した皆さんがこの2日間で得た経験や刺激は、今後の研究活動のみならず、自身の将来を決定していくうえで良い刺激になったのではないかと考えています。



[成果発表会]
小中高校生が1年の成果を発表する会を12月に開催

教員支援助成 [3年間助成]

助成対象

児童生徒の理科の力を向上させるための指導法改善や教材開発などに意欲的に取り組む教員の3年間の継続的な活動。
※単一校ではなく、複数校の教員が連携・協働して取り組む活動を対象とします。

応募資格

左記の活動の企画・運営を行う代表校、または機関、コンソーシアムの代表。
※原則、地方自治体からの応募はできません。教育センターからの応募は可能です。
※教員の自主的な研究会は、組織体として整備され、教育委員会が承認または認知した組織に限ります。
※複数の学校の参画が必須です。

募集期間

10月上旬～11月下旬
(日程は変更する場合があります)

助成金額

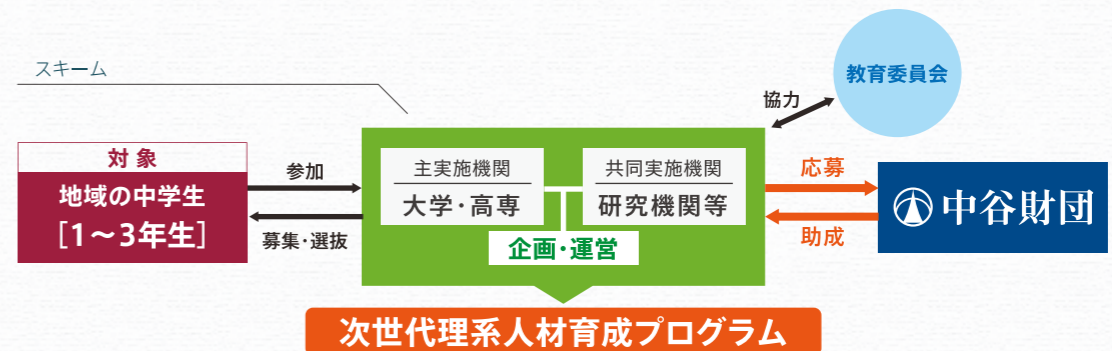
年間最大50万円
3年間で最大150万円
(ただし、1年ごとに継続審査をおこないます)

次世代系人材育成プログラム助成 [最大5年間助成]

大学や高等専門学校が、理数系に優れた資質を持つ中学生を発掘し、多様な興味・関心を汲み取って伸ばし、将来、科学技術分野で活躍する人材を育てる体系的なプログラムに対して助成します。

※優れた資質を持つ中学生に対し特に興味ある分野を見つけ掘り下げるプログラム、理科に興味のある中学生を更に理科好きにさせ、将来科学技術分野で活躍する人材を育成するプログラムを重視します。
※受講希望者を学校の枠を超えて地域から広く公募し、受講生の意欲・能力を客観的に評価し選抜してください。

スキーム



次世代系人材育成プログラム

助成対象

大学・高専が地域拠点となり理数系に興味のある中学生の能力を更に質的に伸ばさせる取組。

応募資格

全国の国公立大学・高等専門学校(主実施機関)
※主実施機関は地域拠点として共同実施機関との連携や研究者とのネットワークを整備してください。

募集期間

10月上旬～11月下旬
(日程は変更する場合があります)

助成金額

年間最大500万円
助成期間5年間の場合、最大2,500万円



STORY of NAKATANI

中谷財団の歴史

「中谷財団の礎」

中谷財団の基礎となる理念

1984年に設立された中谷財団。
その目的は技術の発展だけでなく、日本の社会と人の成長に尽くすこと。
設立者・中谷太郎の強い想いは昭和、平成、令和を経た現在でも財団の基本理念として深く息づいています。

中谷太郎が願った日本技術の成長

■ 初代理事長 中谷太郎の想い



初代理事長 故中谷太郎

中谷財団の設立者・中谷太郎は戦後の復興の中、1949年に父親と共に東亜特殊電機株式会社を設立しました。

東亜特殊電機では主にトランペット型スピーカーの開発・製造を行っていましたが、常に理念として日

本技術の独自性・自主性を考えた企業経営を行っていたと言われていました。

国内外の特許、そして自らの理念と戦いながら製品開発を進める中、1959年に新しい事業の可能性を求めてアメリカに渡った中谷太郎は、医療機器である血球計測装置に注目します。

当時、日本国内の血球計測装置のシェアは海外メーカーが100%を占めており、日本メーカーの活躍する場

は全くありませんでした。

しかし、その血球計測装置の開発に東亜特殊電機のノウハウが活用できることを見つけた中谷太郎は、日本に帰国するとすぐに装置の開発に着手します。

「独自性・自主性」そして、「日本技術の成長」を目標におく中谷太郎の強い想いは見事に実を結び、1963年に国内メーカー初の自動血球計測装置の実用化に成功。続く1968年には東亜医用電子株式会社（現シスメックス株式会社）を設立し、日本オリジナルの血球計測装置メーカーとして以降急速な躍進を遂げることになります。

血球計測装置メーカーとして世界的な飛躍を進める中でも、技術者・中谷太郎の理念が衰えることはありませんでした。

中谷太郎は学術活動や学術データの提供※1など、「日本技術の成長」を促進させる活動を広げ、1983年に



※1:大学教授や研究者との交流を深める場を提供する中、全国の病院の検査室を対象にした「MCCニュース」を発行し、技術交流・発展の推進を行いました。
(MCC:Micro Cell Counter)



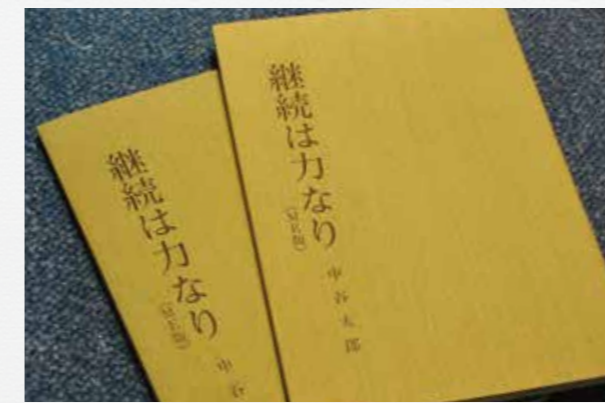
「設立準備委員会」1983年2月

は財団法人 中谷電子計測技術振興財団設立準備委員会を発足します。

学会、財界などさまざまな方々の力を借りながら、1984年4月に「財団法人 中谷電子計測技術振興財団」を設立し、医工計測技術の成長・促進につなげるための新たな足がかりを作り上げました。

この時、中谷太郎は財団の理事長に就任。

しかし志半ば、就任後半年でこの世を去ることになり、大きな柱を失った財団内は明かりが消えたような状態になったといえます。



「継続は力なり」中谷太郎著



1984年度 贈呈式(第1回)

■ 受け継がれる医工計測技術の未来



故中谷正理事

財団設立時には「技術開発研究助成」「調査研究助成」「技術交流助成」の3つが、初期事業として実施されました。

「技術開発研究助成」は現在のようなプログラムではなく、「開発研究助成」(奨励研究助成)の2つの

みで構成されており、財団の規模も大きいとはいえませんでした。10周年、20周年と年を重ねるごと活動を徐々に広げ、2008年においては、中谷財団のブランドシンボルとなる「中谷賞」の新設に至ります。

「中谷賞」は中谷財団の表彰事業の一つです。

医工計測技術全般に関わる人たちの能力と技術を讃え、それらを社会全般に広めていくとともに、発展した技術から生まれる「希望ある未来」を一層広めていくという、「中谷」の名に込められた、強い想いを伝える賞となっています。

そして、2012年。法改正に伴い、財団は「公益財団法人 中谷医工計測技術振興財団」として新たなスタートをきることとなります。この公益財団法人に変更された時期と同じくして、父・中谷太郎の想いを受け継いできた理事の中谷正が逝去いたしました。

中谷正は生前より、父・中谷太郎を深く敬愛しており、財団設立者である父の想いを受け継ぐ財団理事の一人として、父が死去した後においても財団の運営と医工計測技術の未来を常に考えておりました。

中谷正は逝去に際し、自らの遺産相続先に中谷財団を指名。故中谷正の大きな遺贈を受け入れた中谷財団

STORY of NAKATANI

は大幅な事業拡大ができるようになり、その活動に一層の拍車がかかったことは言うまでもありません。

■ つながる想いが未来を創造する

2012年に公益財団法人として新たなスタートを切った中谷財団は、2014年に「特別研究助成」「科学教育振興助成」を開始したのを皮切りに、2016年には「国際学生交流プログラム」を、2017年には「長期大型研究助成」「大学院生奨学金」を開始するなど、次々と積極的に新事業を展開してまいりました。

そして2024年には財団設立40周年を迎えたことを機に、新たな表彰事業として「神戸賞」を創設するとともに、助成事業の範囲もBME(Bio Medical Engineering)分野～生命科学と理工学の融合境界領域～に広げました。

中谷財団ではこれらの助成事業を通じて、小学生から研究者まで幅広い範囲での助成を行うことを念頭に力を注いでおります。特に、若い世代の科学技術への興味を育むための支援や、研究者が長期的な視点で取り組める環境づくりに努めることで、医療技術の革新や日本独自の研究を促進し、希望ある未来社会の構築に貢献することを目指しています。さらに、国が助成しにくいものや結果がすぐに出ない研究に対しても積極的に助成を行うことで、将来性のある研究活動を支え、研究者が安心して挑戦できる環境を整えていきます。

そして、民間財団だからこそできる活動を通して、研究の現場に独創的で斬新なアイデアが育成され、日本の技

術力と創造力向上の連鎖が生まれることを期待しています。

我々は「日本を元気に」していくことを目指しています。これは、一貫して持ち続けている「日本技術の成長」への想い、そしてその先にある「人間の成長」を促進するために、技術者・研究者を愛した故中谷太郎が求める世界の実現を目指しています。

これからも彼の理念に基づき、研究者が困難に直面した際にも支援を続け、技術と人間の調和を図る社会の構築につながるよう、これからも豊かな社会構築のために、故中谷太郎の想いととも、積極的に「未来を創る力」を支え育てていきます。

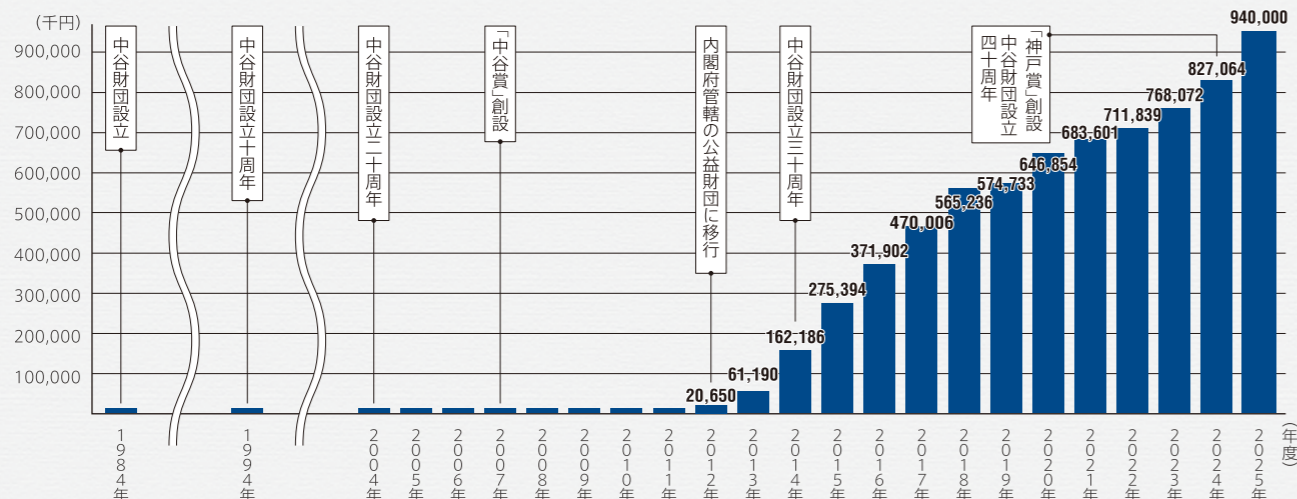
中谷財団は、これからも持続可能な社会の発展に寄与し、多くの人々が安心して生活できる未来を築くために邁進します。これからも多様な分野への助成を通じて、日本の科学技術の進歩を後押しし、新たなイノベーションを生み出す土壌を提供してまいります。



初代理事長 中谷太郎の胸像

中谷財団の事業の推移

▶ 1984年～2025年度までの事業全体額の推移です。



※表彰事業と助成事業の合計額です。※2025年度は予算額です。





<https://www.nakatani-foundation.jp>

本 部

〒141-0032 東京都品川区大崎一丁目2番2号
アートヴィレッジ大崎 セントラルタワー8階

神戸分室

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通一丁目5番1号
国際健康開発センタービル (IHDビル) 5階